第二十一章　自覚されないウソ

一日当たりの新型コロナウイルスワクチンの接種回数が総務省のホームページに載っている。田中がパソコンの操作に集中しているので勝手にテレビの電源が入って同じものが映っているのに気がつかない。

「田中さん。よく見つけましたね」

山本が褒めると少しはインターネットを使えるようになった大家が横槍を入れる。

「総務省で公表しているワクチン接種データなど誰でも検索できるはずじゃ」

「それがそうでもないのです。もちろん公表しなければ見つけることはできませんが……」

大家が首を傾げる。

「どういうデータを公表しているかという一覧表はありますが、そこには『一日当たりのワクチン接種回数』という項目はありません」

「なんと。大事なデータなのに。じゃが総理やワクチン担当大臣はいつぞやは百万回だったとか百五十万回とか豪語していたのう」

「もちろんデータはあります。でも公表リストにはないのです」

田中も大家も首を傾げる。

「リストにありませんが公表はされています。だからしつこく検索しないと見つかりません」
「接種回数のような重要なデータが公表されてないなら大問題じゃ。公表リストに記載するのを忘れていただけで公表はしていると言いたいのじゃな」
テレビ画面にそのデータが表示されるが文字は小さくはっきりと見えない。
「山本さん。拡大表示してくれんか」
「拡大しても元の文字のドットが粗いので読めるでしょうか？」
山本が指摘するとおり拡大してもぼやけて文字と言うより模様のようにしか見えない。当然大家は怒鳴る。
「やり方が姑息すぎる！　どういう仕掛けじゃ？」
「デジタルデータとして公表していないのです。おそらく印刷したデータを安物のスマホで撮影して画像として掲載しているのでしょう」
「都合の悪いデータは公表したくないのじゃな。じゃが一日百万回接種したと豪語しているのならキチンと公表した方がいいのじゃ？」
「それがそうでもないのです」
「？」
「たまに百万回接種できた日があって、ほとんど達成できていなければウソになるでしょ」
「なるほど」

「まだ『なるほど』と言わないで。続きがあります。横道に入りますが」

＊

「権力者の周りには砂糖に群がるアリのような人々が集まります」

テレビ画面に総理の人脈関係図が示される。田中が試しにある人物の顔をタッチする。

「デジタル庁の推進課長です。この課長の前任は総務省の統計局の管理課長で前総理の『一日百万回ワクチン接種政策』の接種回数をごまかした人です」

「ごまかす？」

田中が身を乗り出す。

「この表を見てください」

「見えないぞ。文字が小さすぎる」

大家が目を細めると田中が画面をスワイプする。

「拡大すれば見えるでは……ダメだ。ドットが荒くなってよく見えない。これは確信犯だ」

「だからデジタル庁に転勤したのです」

大家はもちろんのこと、田中にも山本の言葉が飲み込めない。

「情報開示請求しても文書を破棄したとか、あっても黒塗りにする。改ざんや書き直しは持ってのほかですが統計はそう言うわけには行かない。だから見にくくするの」

「そんなバカな」

「黒塗り簡単。でも見にくくするのはテクニックがいるわ。だからこの課長は抜擢されてデジタル庁に栄転したの」

ここで山本は一息入れる。

「いずれにしてもメイキャップに長けた官僚は出世街道に駒を進めることができる。一般道路から高層道路に入るようなものです」

「なるほど」

＊

「さて核心に入ります。総理やワクチン担当大臣のウソを暴露しましょう」

田中と大家が厳しい表情の山本に拍手を送る。

「まず総理は第五波が来る前に『一日百万回ワクチン接種宣言』をしました。形容詞羅列答弁が得意の総理にしては珍しく数値目標を掲げました。それはそれで良かったのですが問題は総理がそう言うと新型コロナ関係各省の大臣や官僚に負担がかかります」

「官僚にとって忖度のチャンスじゃ」

田中が大家の腕を取る。

「黙って聞きましょう」

「まず官僚は大臣に忖度します。大規模接種会場の設営を進言する。足の便がいいところで密にならないように会場は国立競技場のような施設が必要になります」

田中に刺激されて大家も頑張る。
「箱を確保しても中身が大事じゃ。一日百万回接種するなら医師ひとりで百人と仮定すると一万人必要になる」
「その前に毎日百万人分のワクチンを用意しなければならない。保存には冷蔵庫もいる」
山本が頼もしく二人を見つめる。
「よくできました。二重丸」
「ほかに何かあるのかな」
ここで山本の顔が暗くなる。
「達成できなければ誰が責任を取るのでしょうか」
「もちろん、言い出しっぺの総理じゃ」
今度は山本は大笑いする。
「総理は責任を取るのでしょうか。イギリスの首相のように『今回の件は非常に反省し後悔している』って懺悔するのでしょうか」
「それはないな」
「私はマスコミに籍を置く人間。でも選挙の出口調査のように会場の出入り口でカウントするなど不可能です」
田中が小膝を強く叩く。

「そうか。得意の統計ごまかし作戦！」
「誰も数える者はいない。やりたい放題じゃな」
「でしょ？」
今度は山本の表情が厳しくなる。
「信用できない人にお金を預けて残高報告を受けるようなもの」
「摂取人数は水増しされているというのじゃな」
「ワクチンの在庫量で政府が摂取人数の水増ししていたことがわかりました」
大家も田中も山本の過激な説明についていけない。
「たとえばワクチンが十あるとします。六人にしか摂取していないのに九人にとウソをついたとします」
「本当の在庫は四。でも表面上は一しかない」
田中の説明に大家は納得する。
「政府は本当の在庫を知っているので市町村や大企業に安心して接種会場の設営を促した。しかし、元々の供給量を知らされていないうえに自分たちの手持ち量が少ないので市町村は不安になった。でも政府はまともに返事することなく『見なし在庫』という奇妙な言葉を使って本当の在庫量を公表した。この量は接種回数を水増しした回数と合致するのです。でも気付いた者、もちろんマスコミ、専門家、監査法人も含め誰もいませんでした。このからくりを知って

いるのは総理と厚生省だけ」
「監査法人？」
「企業の決算報告書を監査する公認会計士の集団組織。在庫調査のプロです」
「ふーん。いずれにしてもヤバいと思ったのか在庫のことを言わなくなった。接種回数の水増しがバレるからなのか」
「多分そうでしょうね」
「何を信用したらいいのか分からんのう」
「最近になってようやく一日当たりの接種回数を見やすく総務省のホームページを公表していますが以前の見づらい資料と内容がかなり違います。『報告が遅れて後で判明する場合がありますので数字が変わることがあります』と注意書きがありますが、国交省のように報告が間に合わない分を推測で公表して遅れて報告を受けた分を上乗せするようなことはないと思いますが、いかなる事情があろうとも統計は正確でなければ意味がありません」
「ウソなら、ない方がましじゃ」
「でもウソではなくミスだと第三者委員会が報告しています」
「ウソでもミスでも役立たない統計を作っていると言う点は同じじゃ」
田中が大きくうなずくと追加する。
「アクセルとブレーキを踏み間違えて『ブレーキを踏んだ』とウソをつくのと『間違ってアク

セル踏んだ』と正直に言うのも、殺人を犯したことに変わりがない」
「ウソなら追求されるがミスなら未来志向じゃ」
「はあー？」
「今回の指摘を真摯に受け止めて今後このようなことがないようにしっかりと対応してしかるべき研修をしたうえで同じ事案が起こらないように徹底します。と言うことじゃ」
「なるほど」